カトリック新潟教区報

VARIETATE UNITAS

多様性における一致

号　外

2010（平成21年）年11月１日発行

カトリック新潟教区

編集責任者　ラウール・バラデス

〒951－8106　新潟市中央区東大畑通１番町656

TEL.025－222－7457

FAX.025－222－7467

菊地　功

先日４年ぶりに、ガーナを訪問する機会を得ました。ガーナは、24年前に私が神言修道会の司祭に叙階されて最初に赴任した地であり、８年間を山奥の小教区で過ごした土地であり、大げさに言うならば、私にとっての第二の故郷（ふるさと）です。

懐かしい地に招いてくれたのは神言修道会のガーナ管区でした。今年の初め頃のある夕刻、司教館に国際電話は入りました。ガーナで働くドイツ人の友人司祭からでした。用件は、８月７日にガーナの首都アクラで行われるガーナ管区の司祭叙階式を司式してほしいというガーナ管区長からの伝言です。深く考える間もなく、即座に引き受けました。

即座に引き受けた一番の理由は、叙階される５名のガーナ人神言会員のうちのひとりを、私が知っているということにありました。知っているというよりも何よりも、彼は20数年前に私がガーナで働いていた頃、私の小教区の侍者のひとりだったのです。たくさんいた侍者グループの中でも一番年少の方だったと記憶しています。いつもすてきな笑顔で十字架持ちを買ってでていました。この侍者グループからは何名も神学校へ入学しました。実際、司祭になるに違いないと私が信じていたものも数名おりました。ところが神の計画は全く別のところにあった。まるで、旧約におけるダビデの選びの話を思い起こさせます。神はご自分の計画を、ご自分がもっとも良しとされる方法で、必ず成し遂げられると実感しています。

もちろん司祭にならなかったその他大勢の元侍者グループの面々にしたって、それぞれに対する神の計画が、すなわちそれぞれの召命がそこには用意されていた。神はご自分の計画を、ご自分がもっとも良しとされる方法で、必ず成し遂げられるのです。

これだけでも私は出来事に感動して神に感謝せざるを得ないのですが、加えてこの新司祭は、修道会の上長から、日本管区に任命されているというのです。この神の計らいの不思議に、感謝せざるを得ません。

新潟教区にあって私は、２００４年９月以来これまでの６年間、皆さんと一緒に福音宣教のできる教会共同体作りを目指して取り組んで参りました。福音宣教を志さないキリスト者共同体などあり得ません。何らかの形で、それぞれができる範囲で、福音宣教に取り組まなければ、私たちがイエス・キリストに従うと決意したことの意味がありません。しかしながら同時に、そこには様々な困難がつきまとっているのも事実です。一番の困難さは、現代社会の少子高齢化という現実の高波が教会にも明確に押し寄せており、小教区共同体に若い力が不足していることにあるような思いがいたします。何となく小教区共同体に力が不足してきている。そうなりますとどうしても私たちは、考え方が消極的になってしまいます。後ろ向きになってしまいます。

しかしながら神ご自身のご計画は、常に前向きに進んでいるのです。私たちが消極的になるときにも、神はご自分の計画をご自分がもっとも良しとされる方法で、着々と成し遂げて行かれます。時に私たちはそういった神の計画を、無謀だとか、理想論だとか、不可能だとか断定してしまうことがあります。しかしそれが神の計画である限りは、必ず成し遂げられていくのです。ガマリエルの言葉の通り、人間の思いであれば滅びるでしょうが、神の思いは成し遂げられます。

「あの計画や行動が人間から出たものなら、自滅するだろうし、神から出たものであれば、彼らを滅ぼすことはできない。もしかしたら、諸君は神に逆らう者となるかもしれないのだ（使徒５：38）」

例えば私は、新庄における教会建設は、まさしく神の計画の実現の一つの好例であると考えています。数年前に主にフィリピン人を中心とした共同体が、実際に教会を手にすることは実現不可能なことに思われました。しかしそれは今成し遂げられようとしています。

共に信仰に生きている兄弟姉妹の皆さん、新潟教区の地にあって成し遂げられようとしている神の計画に、私たちも預かり力を尽くすことができるように、共同体の中で一緒に福音宣教のために何ができるのかを祈りのうちに考えて参りましょう。困難状況にあっても、挑戦する心意気を失わないようにいたしましょう。そしてなによりも、神の計らいに心から信頼して共に歩んで参りましょう。

教区百周年の準備はじまる

二年後の二〇一二年、新潟教区は百周年をむかえます。記念すべき年にむけて準備がはじまりました。

新潟教区が知牧区として一九一二に創設されてから百年をむかえようとしています。「この歴史の重みを認識し、先人たちの信仰と宣教に生きた足跡をたどり、父なる神への新たな感謝と賛美の機会と共に福音宣教に招かれている私たちが現在取り組んでいる優先課題に力強く前進する決意を新たにする。」という主旨のもとに教区百周年実行委員会が組織されました。五月二十三日の初会合で、以下の方々が各部会長に就任しました。

記念ミサ部会
　三木　順二氏（新潟教会）
記念祝賀会部会
　天田　修平氏（亀田教会）
記念信徒大会部会
　斉藤　清氏（新潟教会）
祈りと十字架リレー部会
　渡辺　明紀氏（新発田教会）
記念誌部会
　斉藤　清氏（新潟教会）
記念ストラップ部会
　渡辺　義久氏（花園教会）

また、来年は各地区で事前記念事業を開催し、教区全体の信徒が広く百周年の祝いと意義に関わっていただきたいということです。

近いうちにロゴマーク、「新潟教区百周年の祈り」の文言等もお知らせしたいとのことで、百周年の節目に信者の温かな理解と積極的な協力が求められています。

ハバロフスク教会との交流

二〇一〇年八月二十五日～三十日、新潟教区から菊地司教を団長にして青年三人を含む十人のメンバーでロシアのハバロフスク教会を訪問、交流してきました。

数年前から菊地司教のもとではじまったハバロフスク教会との交流は、今年は三人の大学生の参加により青年どうしが顔と顔をあわせて共に過ごし、様々な状況について話し合うことができました。

ロシアのカトリック教会はソ連の共産党時代の宗教弾圧のあとに、ふたたび、海外のカトリック教会の援助によってはじまりましたが、いまだに小さな共同体です。ハバロフスク市の人口は六十万人に近いのですがカトリック教会は町はずれに小さな教会が一つあるのみです。

青年の一人、青山教会の加藤　千尋さんの報告をお読みください。

ロシア正教会カテドラル鐘楼からハバロフスク中心街

「信徒の交わり」

青山教会　加藤千尋（大学２年）

今回のハバロフスクへの訪問は、自身の視野を広げる良い経験になりました。世界に目を向けることで改めて日本や新潟教区の現状を客観的にみることができ、また世界全体のカトリック教会だけに留まらずあらゆる宗教・宗派との関わりを考えるきっかけになりました。日本は仏教徒が多いですが、人々の考えはほぼ無信教に近いです。その中で生きてきた為、ほとんどの人が信仰する宗教を持ちごく自然に生活の一部になっている外国の環境には驚きがありました。

宗教への考え方や理解が乏しい日本と比べ、周囲を気にすることなく暮らせることが魅力でありました。ロシアではロシア正教が国教となっていて、街の至る所にロシア正教の教会が建っていて信者にとっては恵まれた環境だと思います。しかし、世界の中でも地域によっては信徒の数が少なく肩身が狭い思いをしている人々も少なくないと感じました。その一つがロシアの中でのカトリック教会の存在だと思います。ロシア正教と違って郊外に普通の家のようにポツリと建っていました。そのハバロフスク教会で同年代の若者と交流をしたことが今回の一番の思い出です。この交流は双方に実りあるものになったと思います。国においてカトリック教会の規模が小さいこと、若者が少ないこと、若者の多くが幼児洗礼であったことなど境遇が似ている為、より考えを共有することができました。また、うまく言葉が通じなかった分、互いを理解しようと努めることができたと思っています。国や文化を越えても同じ神様を信じる者同士、祈りあっていける存在ができたと思っています。信仰を維持したり高めたりしていく為には自分一人の枠で考えるのではなく、教会に行くこと、そして信徒の交わりを持つことが重要と分かりました。

多くの方々の支援や祈りがあったおかげで無事に行ってこれたこと感謝しています。おそらく大学生の今の時期でなければ行くことができなかった為今回訪問できたことはお恵みだと思っています。これからも少しでも多くの若者や信徒がこうした活動に参加できたらと思います。

ロシア正教カテドラル鐘楼で（地上70メートルです！）

森の別荘で昼食